

社会実験による町並みへの観光客誘導可能性の検証 : 足助における「まちなか観光」 2

正会員 ○ 六田 康裕*
同 西川亮*
窪田亜矢**

足助 観光 社会実験
町並み

1. 本稿の目的と構成

本研究は、2008年11月に東京大学大学院都市デザイン研究室が主体となり愛知県豊田市足助地区において実施した観光社会実験の結果をまとめ、今後の観光のあり方について示唆を得ようとするものである。

特にその2では、重要な観光資源である香嵐渓をいかし、まちなかに観光客を誘導する可能性について検討する。



香嵐渓の紅葉

2. 足助地区の観光

2.1 足助観光の位置づけ

豊田市は、豊田市観光交流基本計画（豊田おいでんプラン）を第7次総合計画（計画期間：平成20年度から平成29年度）の観光交流分野における基本計画として策定した。目標年度は第七次総合計画に合わせて平成19年度から平成29年度としている。

計画によると、足助地区は複合地域核として山村振興対策の中心となる地域として位置づけられており、この対策の一つとして観光振興が挙げられている。香嵐渓の集客力を生かし、観光交流の中心拠点として市内と市外との連携を強化しつつ、多くの来訪者を他地区へ誘客し、滞在時間の拡大と回遊性の向上を図ることを目標に据えている。

具体的には、足助地区の観光の課題を

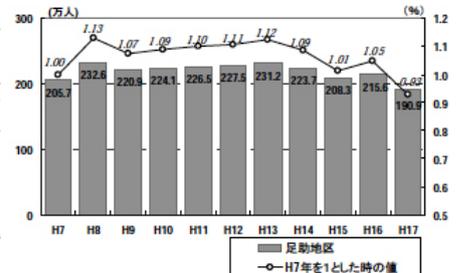
- ・香嵐渓の景観保全と回遊性の向上
- ・まちなか観光推進のための環境整備
- ・地区全体に観光客を受け入れるための体制作りと捉え、香嵐渓エリアとまちなかそれぞれの整備により価値向上を図る中でこれらの課題をクリアし、通年型観光地化を目指している。

2.2 足助観光の現状

近年の観光客数は、ほぼ横ばいで推移していたが、平成17年にはやや減少が見られる。また、観光地別訪問者は、香嵐渓が130万人を越え群を抜いた結果となっている。

一方で、隣接する町の中心部は宿場町や在郷町として栄

え、江戸時代末期から昭和にかけての様々な建築物で構成される独特の町並みが残っているが、この町並みを観光するスタイルはまだ確立されていない。

足助地区における観光客数の推移
(豊田市観光交流計画より抜粋)

2005年に豊田市が行ったアンケート調査によると、足助地区における観光資源の認知度・訪問率・訪問意向率の全てにおいて「香嵐渓」「香嵐渓もみじまつり」「三州足助屋敷」といった香嵐渓エリアに属する施設が上位を占めており、足助地区内の他のエリアへの観光客の誘導が不十分であることがわかる。

豊田市が目標とする通年型観光地化の実現の一つの解としては、イベントに頼らない「町並み自体を楽しむ」観光スタイルの確立が考えられるが、まちなかと香嵐渓エリアの結びつきの弱さが課題であるといえる。町並みの認知度を上げ、興味を惹き、実際に訪ねてもらう施策が必要である。

また、2008年に豊田市が実施した観光施設活用計画のアンケートによると、観光情報の入手先として、知人からの情報や観光情報紙、インターネット情報誌など事前の情報上位を占め、観光協会やビジターセンターなど、現地で情報を得られる機関が本来の機能を十分に活かしきれていないことが窺え、これらの機能を補完するような観光案内の手法・施設が求められている。

3. 観光社会実験

3.1 社会実験の目的及び意義

足助地区における町並み観光の可能性を探るための社会実験を2008年11月29日（土曜日）、30日（日曜日）の2日間にわたり実施した。この時期に実験を行った理由は以下の2点である。

- ・隣接する香嵐渓を多くの観光客が訪れており、町並みを効果的にアピールできる。
- ・まちなかでの観光客向けのイベントが行われていない時期に実験を行うことにより、町並みそのものを楽しむ町並み観光の可能性を探ることができる。

なお、本社会実験は足助観光協会及び豊田市の協力を得ながら基本的に実施・運営ともに東京大学大学院都市デザイン研究室のメンバーが行った。

3.2 社会実験の概要

前述の目的を達成するため、以下の施策を実施した。なお、本稿で扱う範囲は社会実験の「香嵐渓に来た人をまちなかへ呼び込む」段階に限定し、まちなかでの観光客へのアピールに関しては「社会実験による町並み観光の可能性の分析：足助における『まちなか観光』3」に譲る。

(1) 足助の町並みを紹介する地図の作成・配布

社会実験のために地図を作製し、次項で述べる臨時観光案内所にて配布した。足助の町並みと香嵐渓を「紅葉」でリンクさせることにより、本来は香嵐渓エリアを目的として足助地区を訪ねた観光客に町並みエリアへの興味を抱いてもらう工夫をした。

地図の表面は「町から見る香嵐渓」とし、町並みエリアの地図上に町から見える香嵐渓の眺望ポイントをプロットして、「見上げる」「見渡す」「まちなかから見る」という新たな香嵐渓の楽しみ方を提示し、香嵐渓を楽しみながら町並みを歩いてもらえるよう工夫した。裏面は「足助の町並み」とし、町並みの歴史や文化を紹介した¹⁾。

地図は2日間で約4000部を配布した。



配布地図（表面）

(2) 臨時観光案内所の設置

観光客との接触が多い香嵐渓内、香嵐渓エリアとまちなかの両エリアの結節点である常夜燈付近の2か所に観光案内所を仮設した。各案内所には案内員2名程度を常駐させ、前述の地図の配布及び町並みの写真展示を行い、町並みの周知を図り、誘導を行った。

3.3 社会実験の結果

社会実験の目的を検証するために、以下の三つの手法を用いた。

(1) 観光客へのアンケート

香嵐渓内観光案内所、および西町入り口にて手渡しで配布し、当日町並みエリア内に設置した観光案内所にて回収、あるいは郵送にて回収した。回収数：77枚（配布：875枚、回収率9.2%）

(2) まちなか観光客の人数カウント

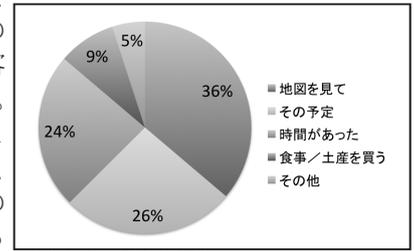
まちなかへの入り口において入り込み観光客数を10時から16時まで、1時間ごとに10分間計測を行った。なお、

社会実験実施の2週間前の11月15日（土曜日）に同様の計測を行い、今回得られたデータと比較を行った。

(3) 住民へのヒアリング

社会実験終了後、実験を行う前と比較して町並みを歩く観光客が増えた印象があるかをヒアリング調査した。

アンケート結果より、配布地図を見て足助の町並みを訪れた観光客が多いことが分かる。また、「町並みがあることは知らなかったが、丁寧な案内があったのでまわったら、よかった。」との声もあり、地図をきっかけに町並みを知った人がいたことがわかる。しかしその一方で、配布した地図



まちなかを訪れた理由

	10時	11時	12時	13時	14時	15時	16時
15日	16	8	7	13	27	22	
29日	29	41	19	29	31	20	14
30日	22	28	29	33	32	23	19

観光客数（単位：/10分あたり）

にはまちなかの情報のみを掲載したため「香嵐渓の地図はないのか」「香嵐渓からまちなかへのアクセスがわかりづらい」との声も聞かれた。

また、カウントした町並み観光客数も、社会実験前と比較すると全ての時間帯において増加傾向にあるといえる。

さらに、ヒアリングによると、住民も社会実験中にまちなかを通る観光客の増加を感じていた。

これらの結果から、適切なPR活動を行うことにより観光客を香嵐渓エリアからまちなかに誘導することは可能であるということがわかった。

4. 今後への課題

社会実験からまちなかへの観光客誘導の可能性は明らかとなったが、同時にいくつかの課題も明らかになった。

まず、効果的な誘導のためには観光客の嗜好を適切に把握する必要がある。観光客の多くは香嵐渓のみを目的として足助地区を訪れており、町並みの知名度は低いため、効果的に誘導するためには配布する地図に香嵐渓エリアからまちなかへのアクセスに関する情報を盛り込むといった工夫が望まれる。また、今回は情報発信の場が2か所の臨時観光案内所に限られていたが、今後はサインを配置することなど、広く町並みの存在をアピールする手法を取り入れ、観光客に接触する機会を増やすことにより一人でも多くの人に町並みへの興味を抱いてもらう必要がある。

そして、今回は都市デザイン研究室の学生が主体となって社会実験の運営を行ったが、持続可能性や必要な人員数を考慮すると、今後香嵐渓エリアからまちなかへの誘導を行う際には住民主体の取り組みとしていくことが重要である。住民と学生の間で議論を重ね、ノウハウを共有していくべきであろう。

¹⁾ 地図裏面についての詳細は「社会実験による町並み観光の可能性の分析：足助における『まちなか観光』3」を参照のこと

* 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 修士課程

** 同上 准教授・工博

*Graduate school of Engineering, Univ. of Tokyo

**Associate Prof., Faculty of Eng., Univ. of Tokyo, Dr. Eng.